

第7章

本事業に対する評価等



1 管理官報告

第46回「東南アジア青年の船」

事業

管理官 山本茂樹



1. はじめに

令和元年度「東南アジア青年の船」事業（第46回）は、10月25日に東京で参集式を行い日本におけるプログラムを実施したのち、横浜港より東南アジアに向けて「にっぽん丸」に11か国の青年を乗せて出航した。その後、ホーチミン市（ベトナム）、シンガポール、ヤンゴン（ミャンマー）、ポートクラン（マレーシア）を経て東京で解散式を行って全行程を無事終了することができた。帰国のため空港に向かう青年たち全員を晴海埠頭で一人一人見送ったが、全員何らかの成果を確実に手にして一定の満足感を得たのではないかと感じた次第である。

2. 日本国内活動

参集式の翌日から、参加青年はSGごとに、青森県、岩手県、福島県、千葉県、神奈川県、新潟県、長野県、大阪府、佐賀県、長崎県及び熊本県で地元青年との交流、ホームステイ等を行った。外国青年にとっては日本の社会や文化を知り、また出会ったばかりの各国青年同士にとっては打ち解けあう良い機会になったものと聞いている。

東京に戻ってからは、ディスカッションのテーマに即した課題別視察を行ったほか、文化交流プログラムも実施された。また、各国のNL、YL及びAYLが、10月31日に安倍総理大臣表敬の機会を得るとともに、11月1日には秋篠宮眞子内親王殿下及び秋篠宮佳子内親王殿下に御引見いただいたところである。なお、本年度については、都心の宿泊施設の確保が極めて困難であったため、外国青年が東京都心を散策する機会がなく、移動に多くの時間を割かざるを得なかったことは、残念なことであったと思う。

3. 訪問国活動

今回の事業では、ベトナム、シンガポール、ミャンマー及びマレーシアに4日間ずつ寄港し、2泊3日のホームステイのほか、課題別視察、地元青年との交流、表敬訪問などを実施した。

(1) ホームステイ

参加青年が最も楽しみにしているプログラムの一つでもあり、今回もその円滑な実施に努力された関係者には

心から御礼を申し上げたい。各国ともホストファミリーを確保するのに苦労されていることは理解しており、そのために直前まで調整が続いたり、若干趣旨が徹底されていないケースが散見されたりしたようであるが、来年度以降も出きるだけ個別事例で問題が生じないよう各国の努力に期待したい。

(2) 課題別視察及び地元青年との交流

課題別視察及び地元青年との交流では、公的機関や団体、大学などを訪問し、船内でのディスカッションのテーマについての情報収集や地元青年等との交流を行った。

いずれの国もそれぞれに工夫を凝らしてプランを練られていると感じたが、ディスカッションとの関連をどう位置付けるのが良いのか、SGごとの視察が良いのか、DGごとの視察が良いのか、現場では講義が良いのかディスカッションがあるべきか、どのような形式で地元青年とどう交流するのが良いのか、来年度以降アンケート結果などを参考にしつつ、さらなる工夫をしていく必要があるように感じた次第である。

(3) 到着歓迎式、表敬訪問等

各国とも心のこもった到着歓迎式等を催していただき、また多くの政府高官等の御出席を得て歓迎の言葉をいただけたことは、参加青年たちにも、この事業がいかにより高い評価を得ているかを実感する良い機会になったものと考えている。いくつかの国では、極めてフランクに参加青年たちとの会話を楽しむ幹部もおられたが、こうしたことは参加青年たちの心に強い印象として残るのではないかとと思われる。

4. 船内活動

本事業においては、訪問国活動とともに大きなウェイトを占めるが、今回も寄港地間の短い日程の中に、多くのプログラムが入ることとなった。プログラム以外の時間における交流も有意義であり、そうした時間も十分確保できるよう一定の配慮を続けていくべきであると私は考えている。

(1) ディスカッション活動

参加青年は、「防災と復興」、「多様性と社会的包摂」、「教育」、「雇用とディーセントワーク」、「環境と持続可能性」、「健康とウェルビーイング」、「情報とメディア」、「ソフト・パワーと青年の外交」及び「青年の起業」の9つのテーマに分かれて各国の状況の理解を深め、また共通の課題について活発な意見交換が

行われていた。各ファシリテーターの献身的な努力もあり、有意義な場になったものと確信している。

とはいえ、どのようなテーマでどう議論するのが良いのか、社会経済政治宗教の異なるもの同士が国を代表して参加しているという立場を超えて率直にどこまで話合えるか、英語能力、テーマへの関心度にばらつきがある中どのような進め方が良いのか、今後も不断の見直しを行っていくことが重要ではないかと感じた次第である。

(2) ナショナル・プレゼンテーション

ナショナル・プレゼンテーションは、参加国ごとに、歴史、文化、国民性、現在の青年を取り巻く環境などについて、様々な角度から自国を紹介するものである。

それぞれ、各国において事前に相当の時間をかけて準備したことが窺われ、映像も駆使して見応えのあるものだった。ただ、若干残念だったのは、いくつかの国については、文化紹介に焦点がおかれすぎだったように感じたことであり、もう少し各国の抱える問題点を、全参加青年が共有し、ともに考える契機となるような工夫があればよかったのではないかと思った次第である。

(3) その他

以上のほかにも、SG活動や、PYセミナー、参加青年の自発的活動である自主活動が行われた。このような場を企画、実施する中で、青年たちがリーダーシップスキルを身に着ける経験を積むことができたのではないかと感じている。

5. おわりに

私は2019年の夏に、日本の通常の国家公務員キャリアパスを終え、現在、内閣府にスタッフとして勤務している。「東南アジア青年の船」については、第29,30回において「管理官」を務めた経験を持つが、まさか還暦近

くになって再度「管理官」を拝命するとは思ってもおらず、相変わらずの英語会話能力不足に加えて、体力面でも本当に務まるのか当初不安であった。

しかしながら、事業を成功裏に終わらせようというNLの皆さんの努力、青年たちとの距離感を実にうまく保ってくださったファシリテーターの皆さん、各国を代表して参加している事業の意義について理解のあるPYの皆さん、そしてきめ細かく事業の進展を支えてくれた管理部の皆さんのおかげで、どうにか最後まで頑張って務め上げることができたと感じており、この場を借りて心からの感謝を申し上げたい。

横浜港では、第29回の日本PYから激励をいただき（シンガポールPY1名含む）、また各寄港地でも、29,30回のNL、PYとの再会を実現することが出来たことは、個人的にはとても嬉しいことであった。また、16,17年ぶりの各国の社会経済状況の様変わりを実感できたことも、私にとっては大きな収穫であった。各国青年の英語能力も総じて高くなっており、その分、ディスカッションを「楽しむ」余裕のあるPYも増えたことを実感した。

SSEAYPの参加者は、毎年毎年入れ替わっていくわけであるが、この事業に対する各国における評価の高さも改めて実感することができた。どんなに情報通信技術が発達しても、11か国の青年が共同生活を送ることを通じて得られる、異文化体験、相互理解は、きわめて意義深いものがあると私は確信しており、事業の不断の見直しを行いながら、この事業が50回、100回へと引き継がれていくことを強く期待したい。

今回の事業中、私はseasickには幸い1度もならなかったが、今や強度のSSEAYP-sickになっている。今後もし何かの折に、皆さんと再会できたらと願っており、微力ながらも本事業に引き続き貢献しうることがあれば、積極的に行っていくことを誓い、この文章を終えることとしたい。

2 参加青年による事業評価

参加者に対してプログラム終了時に事業評価アンケートを実施した。集計結果は次のとおり。

注：対象は、ナショナル・リーダー11名、参加青年317名。

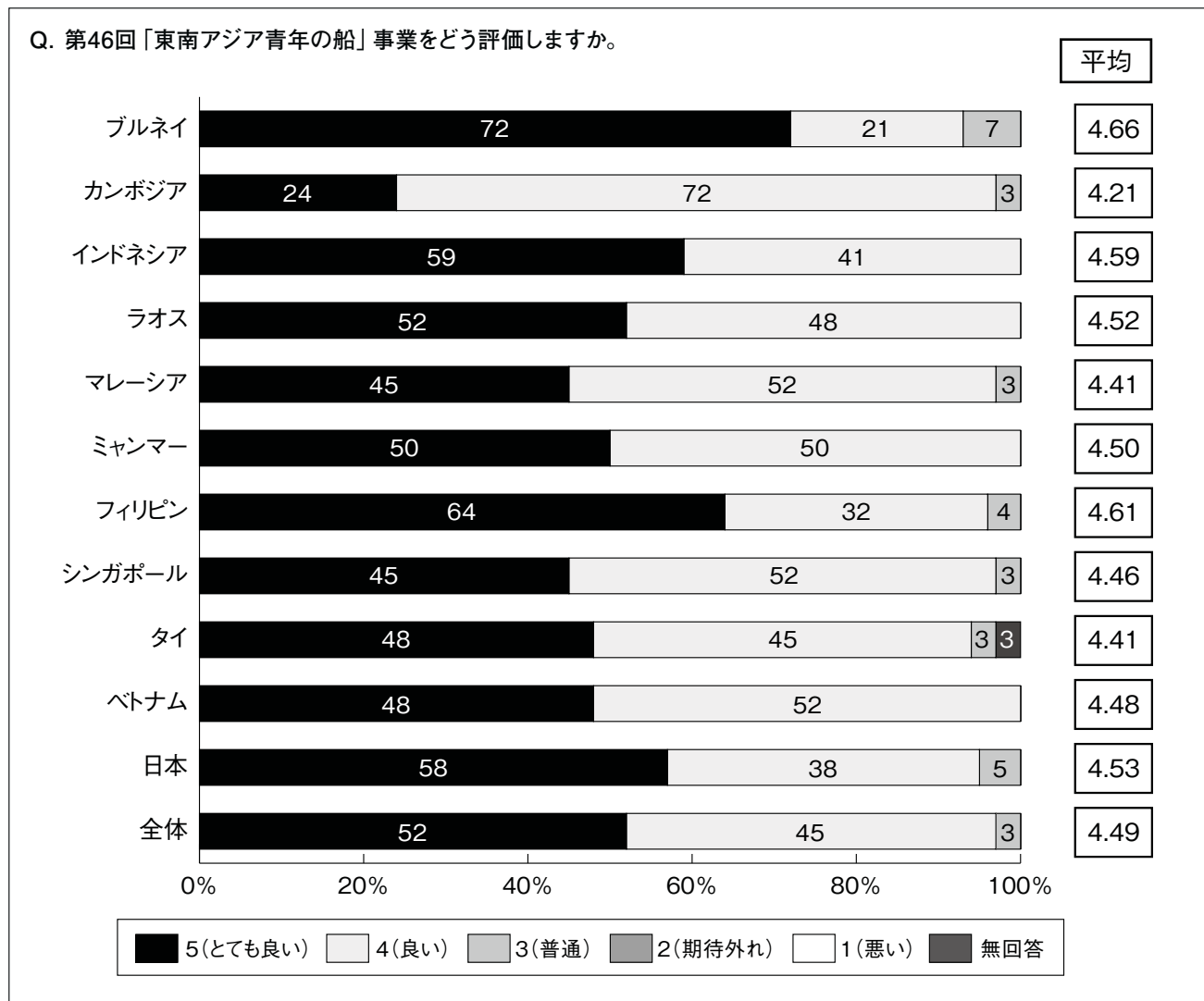
値は小数第一位で四捨五入されている。

統計処理上、合計が100%にならないことがある。

[事業全体]

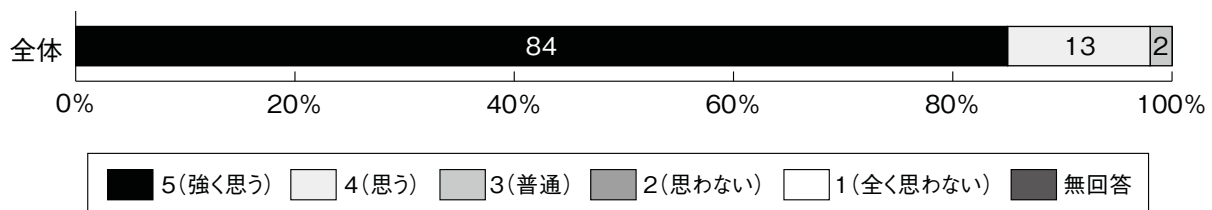
事業全体に関しては、全体平均は4.49で、97%の参加者が4以上（良い、とても良い）と評価した。

この事業が各国からの参加者間の「相互理解を促進すること」及び「友情を築くこと」に貢献していると思うかとの問いに対し、それぞれ97%、99%が4以上（思う、強く思う）と評価した。また、この事業が自己の能力向上にどのように役立つと考えるかとの問いに対し、「異文化への対応力」、「集団生活への適応力（協調性と柔軟性）」、「自国民としてのアイデンティティーと誇り」、「自己管理力」及び「国内外の友人・ネットワーク作り」に関して、91～95%の参加者が4以上（大きな効果がある、著しく大きな効果がある）の評価をした。



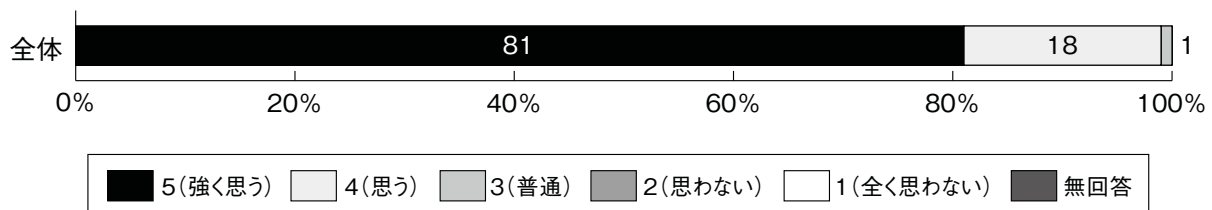
Q. この事業が、あなたと各国の人々との相互理解を促進することに貢献していると思いますか。

平均: 4.83



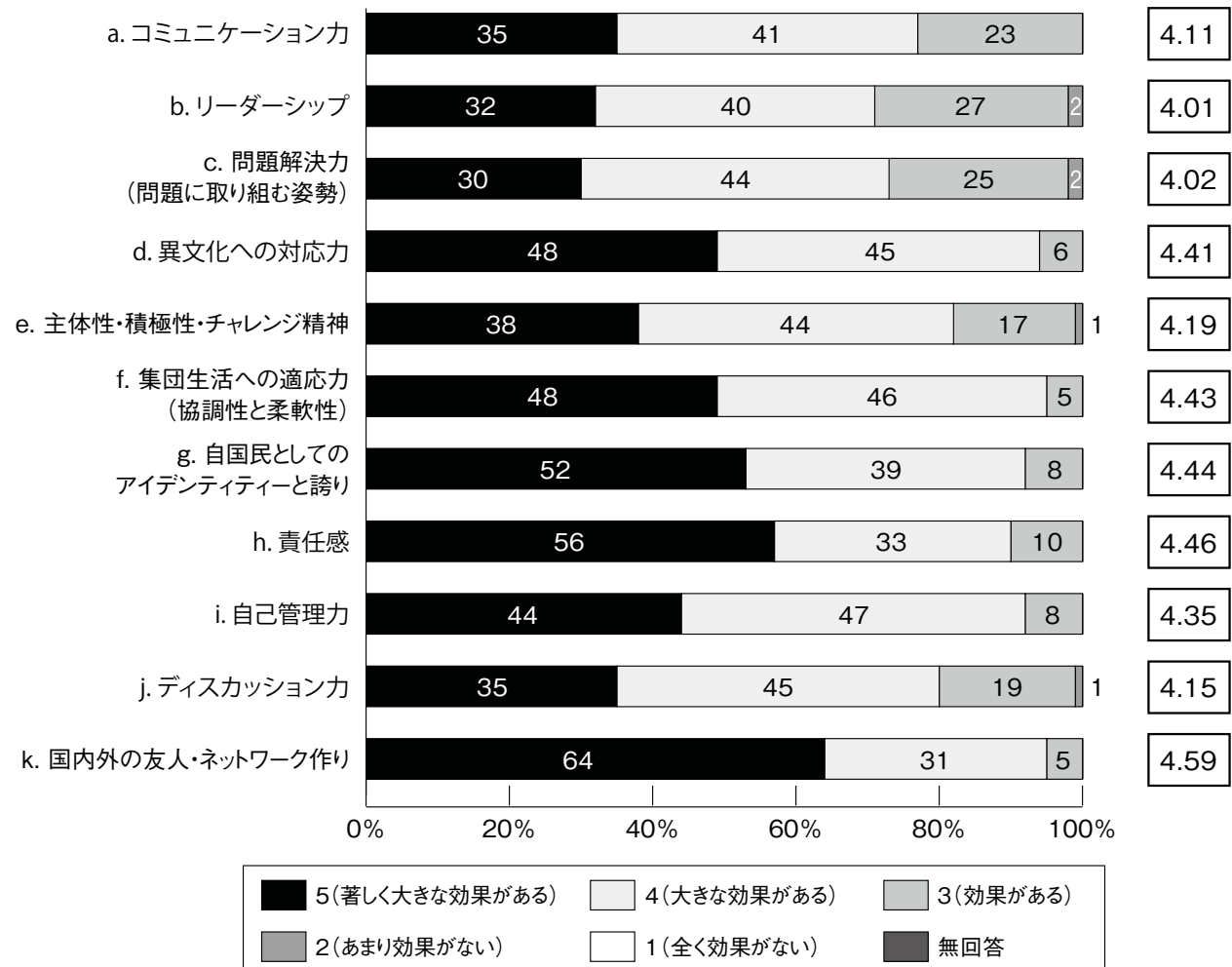
Q. この事業が、あなたと各国の人々との友情を築くことに貢献していると思いますか。

平均: 4.80



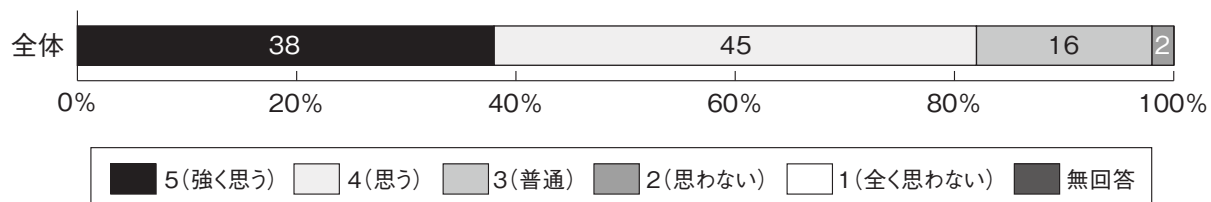
Q. この事業が自己の能力向上にどのように役立つと考えますか。それぞれの項目について回答してください。

平均



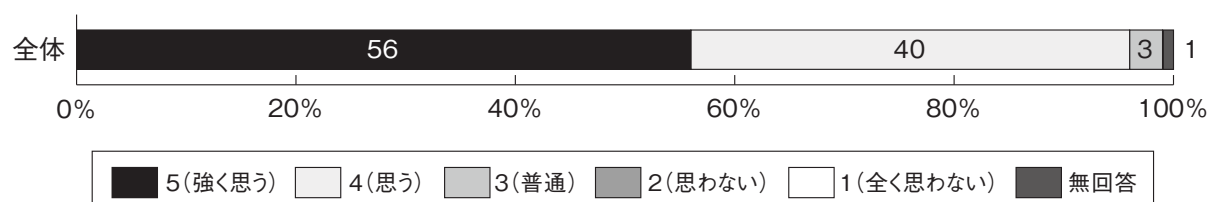
Q. この事業への参加は、あなたのキャリア（職業）における将来性を高めると思いますか。

平均: 4.19



Q. この事業への参加は、社会貢献活動へ参加したいという意欲を高めると思いますか。

平均: 4.53

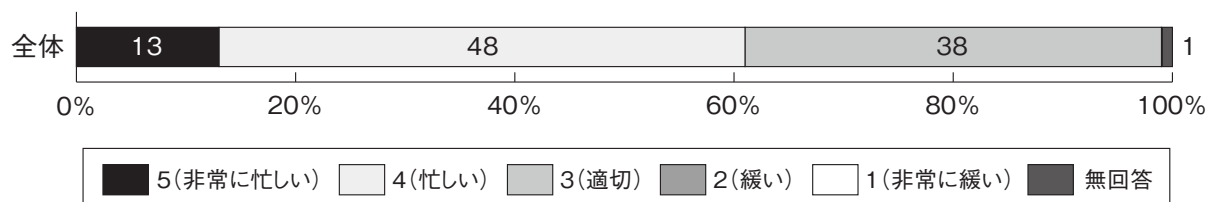


[船内活動]

Q. 船内活動の日程についてどう思いますか。

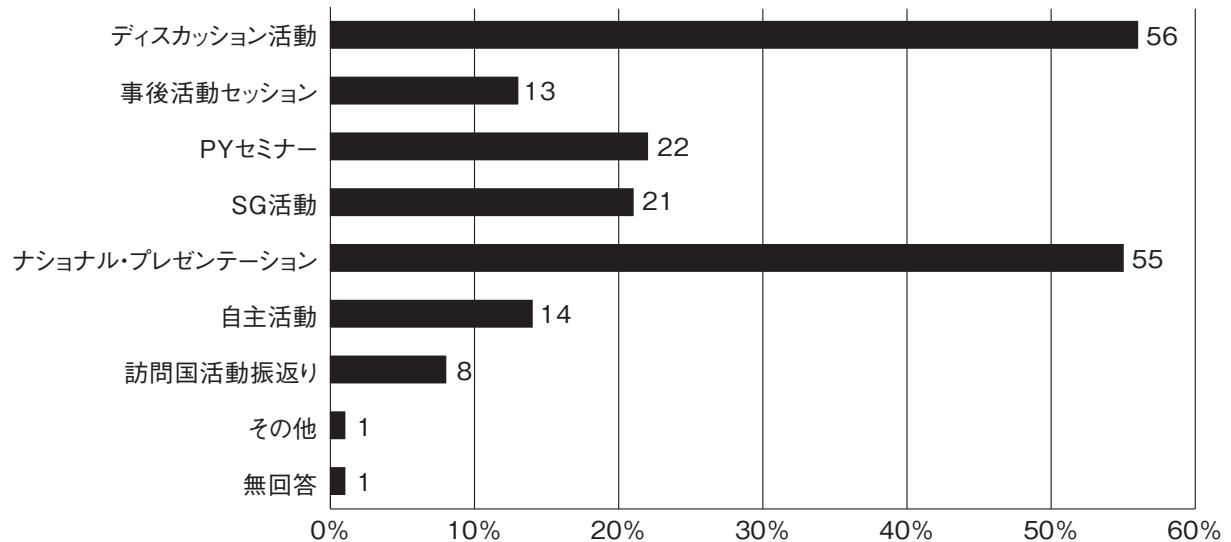
船内活動の日程について、38%の参加者が3（適切）と評価し、61%が4以上（忙しい、非常に忙しい）とした。

平均: 3.74

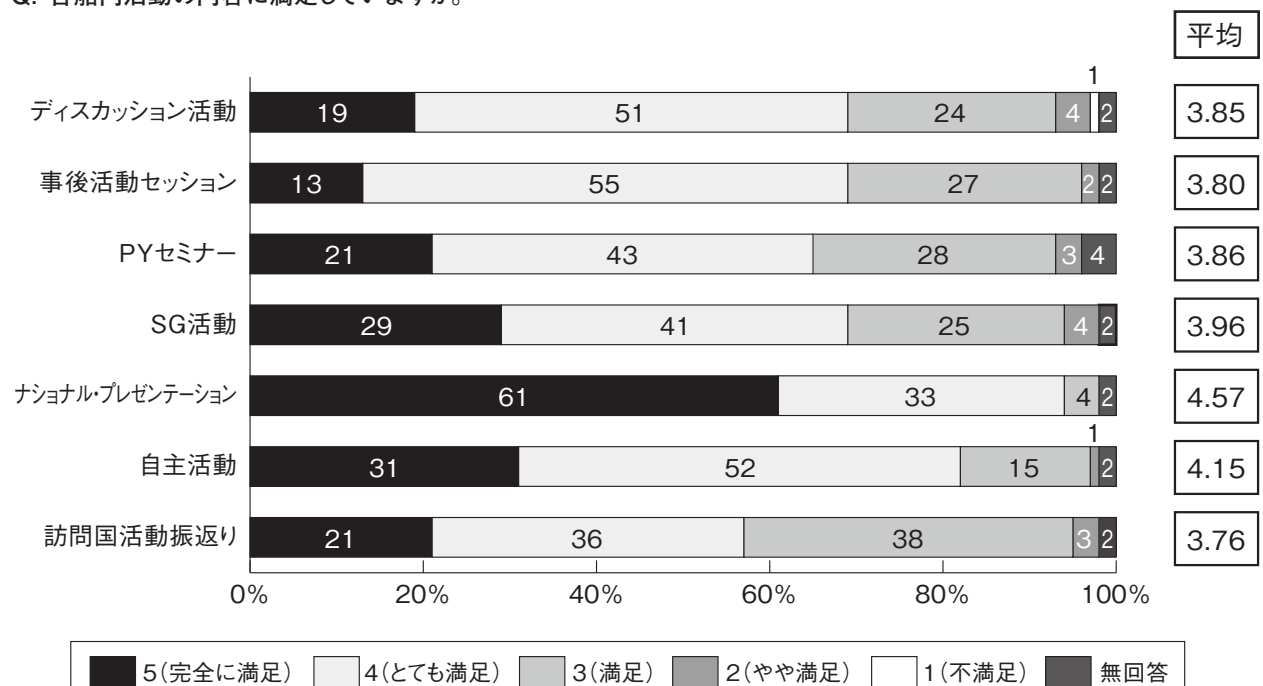


船内活動について、「最も意義のある船内活動」として参加者が選択（1つ又は2つまで選択可）したのは、多い順に、ディスカッション活動（57%）、ナショナル・プレゼンテーション（56%）となった。一方、それぞれの船内活動の内容についての満足度は、全体平均の高い順に、ナショナル・プレゼンテーション（4.27）、自主活動（3.83）となった。

Q. 最も意義のある船内活動は何ですか。（1つ又は2つまで選択可）



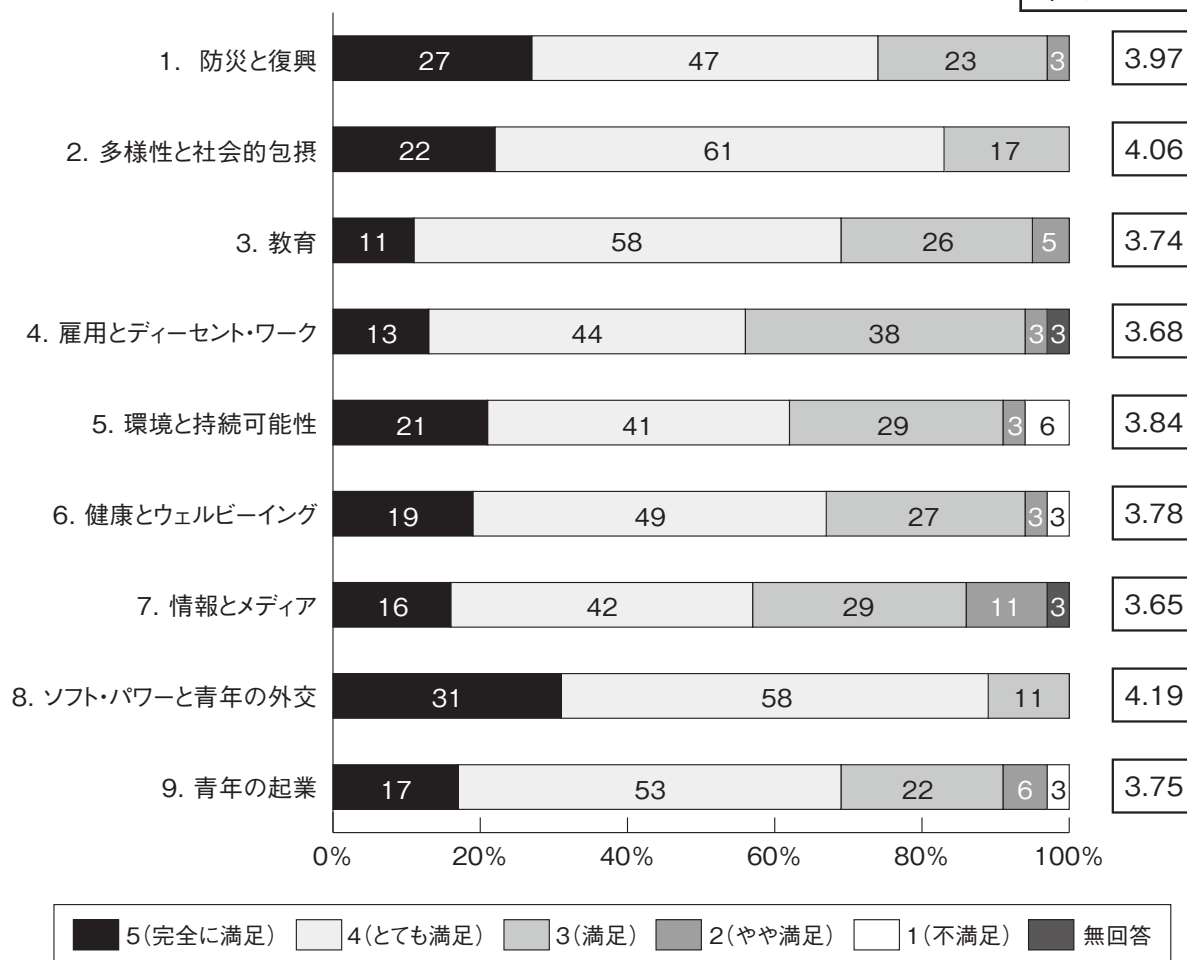
Q. 各船内活動の内容に満足していますか。



[ディスカッション活動]

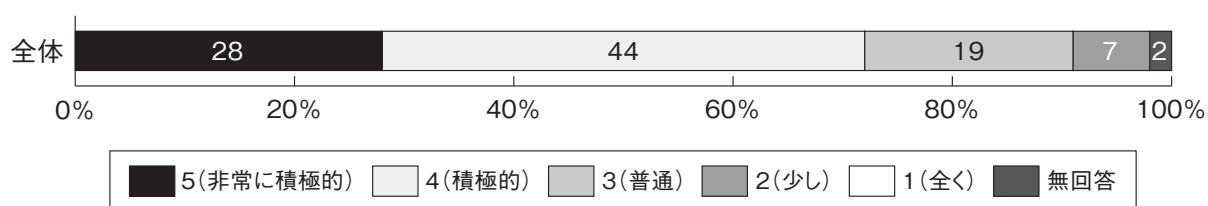
Q. ディスカッション活動の内容に満足していますか。 *PYのみ

平均: 3.85



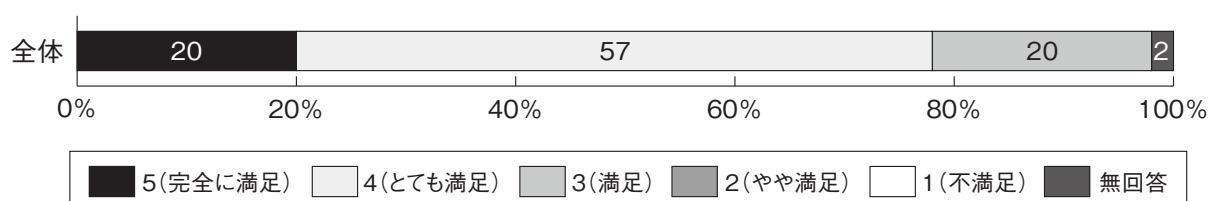
Q. あなたはどれくらい積極的にディスカッション活動に参加しましたか。 *PYのみ

平均: 3.96



Q. 11月27日に行われた、事後活動の企画・実践への導入及び事後活動の企画・実践に向けたワークショップの内容は、事後活動セッションIII及びIVにて事後活動を計画する際に役立ちましたか。

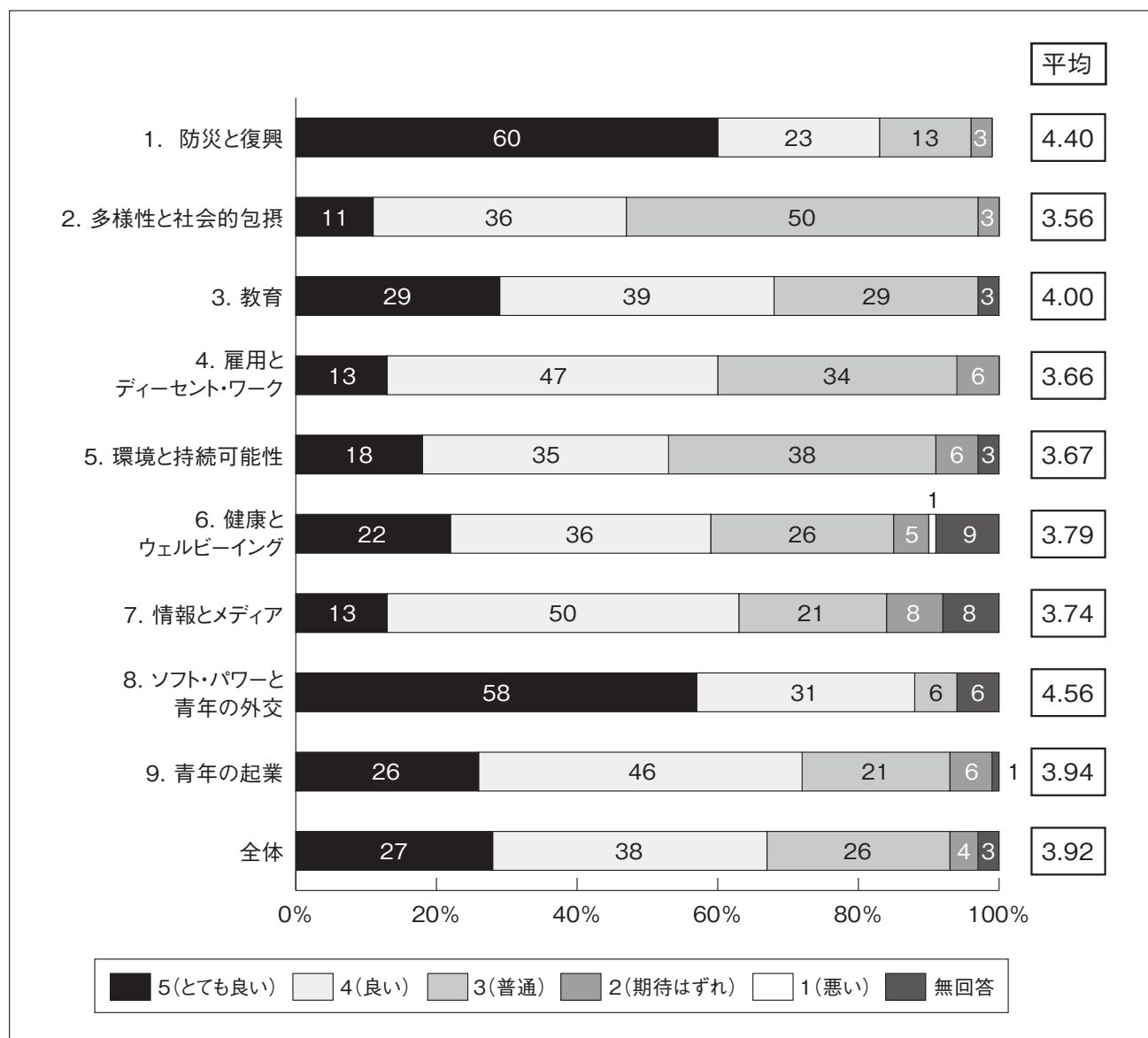
平均: 3.99



[日本及びベトナムにおける課題別視察]

Q. ディスカッションのグループ・テーマとの関連において、日本における課題別視察をどう評価しますか。

ディスカッションのグループ・テーマとの関連において、日本における課題別視察に参加した青年の65%が4以上（良い、とても良い）と評価した。



DG1: 三井不動産株式会社

DG2: 株式会社ボーダレス・ジャパン

DG3: 品川女子学院

DG4: 株式会社ディーセントワーク

DG5: 国際航業株式会社

DG6: 認定特定非営利活動法人カタリバb-lab（文京区青少年プラザ）、認定特定非営利活動法人PIECES

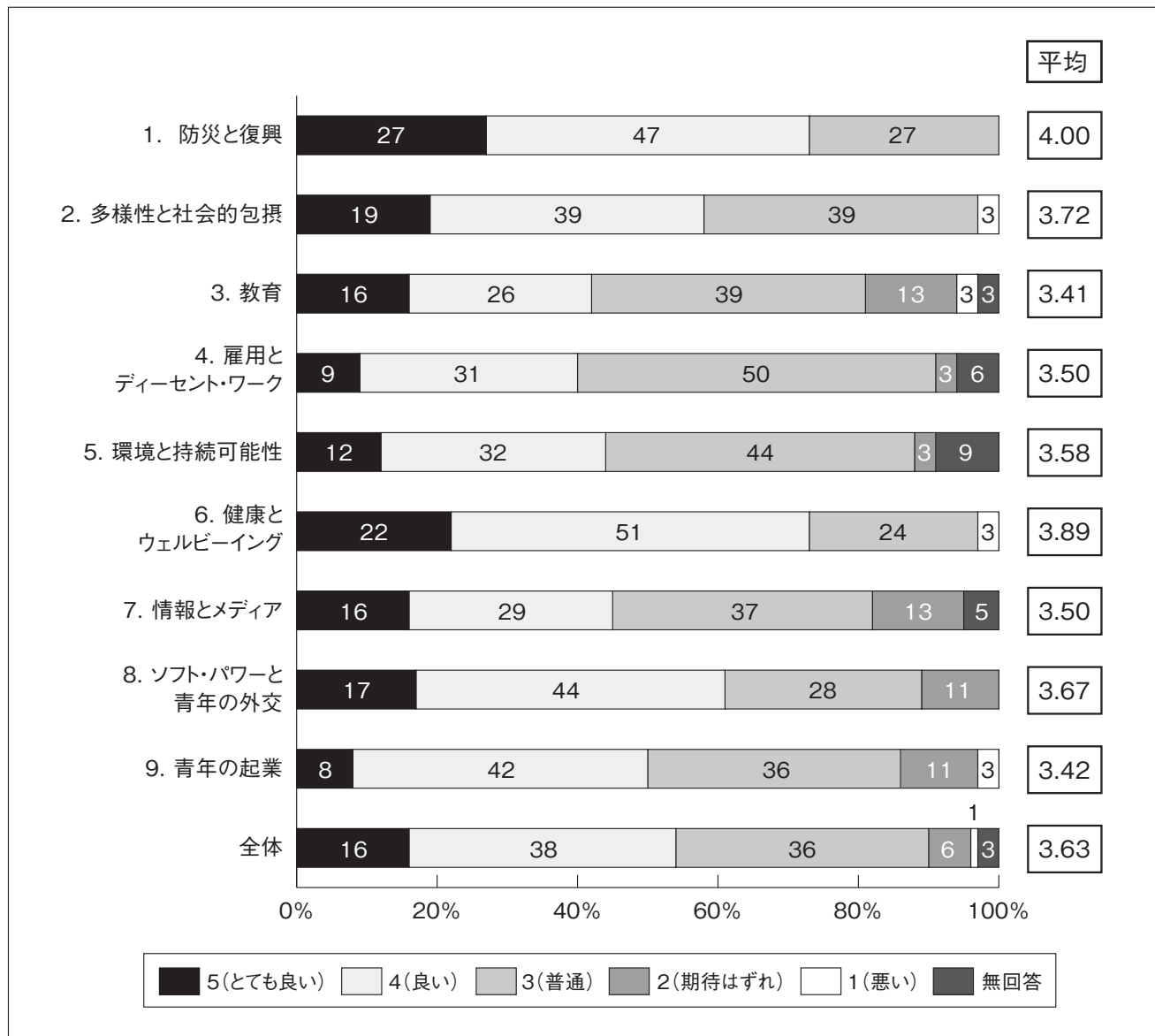
DG7: 株式会社博報堂DYホールディングス

DG8: 一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT)

DG9: 株式会社LORANS、株式会社BOUNDLESS

Q. ディスカッションのグループ・テーマとの関連において、ベトナムにおける課題別視察をどう評価しますか。

ディスカッションのグループ・テーマとの関連において、ベトナムにおける課題別視察に参加した青年の54%が4以上（良い、とても良い）と評価した。



DG1: ベトナム国家大学ホーチミン市校工科大学

DG2: ベトナム国家大学ホーチミン市校人文社会科学大学

DG3: ホーチミン市師範大学

DG4: 青年雇用サービスセンター (YESセンター)

DG5: ベトナム国家大学ホーチミン市校科学大学

DG6: ファムゴックタック医科大学

DG7: ホーチミン市新聞センター

DG8: ホーチミン市経済金融大学

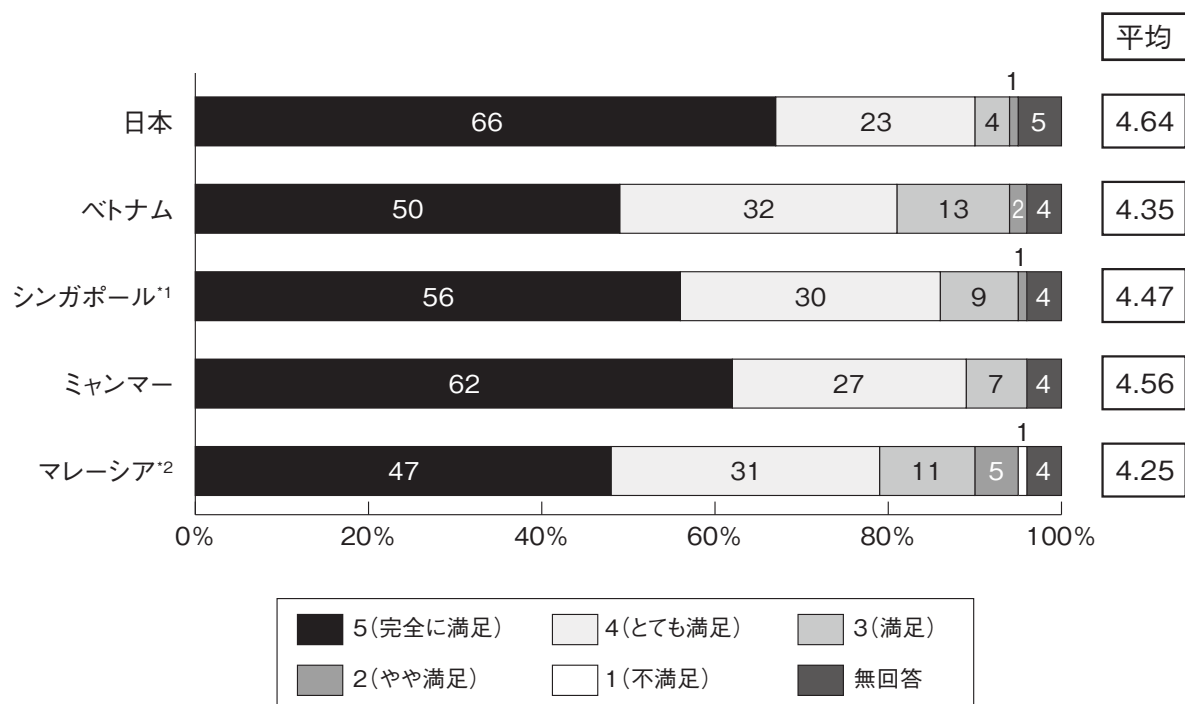
DG9: サイゴン・イノベーションHUB

[ホームステイ]

Q. ホームステイはどうでしたか。

全ての訪問国において、78～89%が4以上（とても満足、完全に満足）と評価した。

*PYのみ *1:シンガポールPYを除く、*2:マレーシアPYを除く



にっぽん丸船長 仙田晶一

こんにちは、第46回「東南アジア青年の船」事業でにっぽん丸船長を務めました仙田晶一と申します。私はこれまで、ばら積み船、LNG船、タンカー等の貨物船に従事しており、客船及び「東南アジア青年の船」事業は初めての経験であったので全ての出来事が新鮮でした。今回の航海は大きく以下の4つに分けることができます。全体的には台風に始まり台風が終わった航海でした。航海中、海、空の自然はいろんな表情を見せ、それらに反映してにっぽん丸は跳躍し、PY、管理部、本船乗組員もいろんな表情を見せた航海でした。



1. 台風ナクリ避航～ハイナン島からベトナム沿岸航行
2. ホーチミン～シンガポール～ヤンゴン～ポートケラン
3. 台風カンムリ避航～SULU SEA航行～太平洋
4. 太平洋～東京へ向けて

上記について、小職のメモを基にした航海の概要を以下に記します。

1. 台風ナクリ避航～ハイナン島からベトナム沿岸航行

2019年11月3日、にっぽん丸は横浜港大根橋を出港。

出港前より台風ナクリが南シナ海へ接近している情報が入っており、にっぽん丸は台湾とフィリピン・ルソン島の間のバシー海峡付近で台風ナクリと遭遇する状況であり、11月6日以降本船が大きく揺れる可能性があるとして、出港後すぐに注意を呼びかけた。

11月6日バシー海峡、当初のホーチミンに向けた最短コースから北側のハイナン島からベトナム沿岸に沿って航行するコースへ変更。このコース変更によって、波を船尾から受けて船体動揺が小さくすることができた。このおかげで、夕方からの日本のNPは、PYたちが元気なパフォーマンスを発揮できたと感じた。NPは漫画、アニメの最近の日本の文化紹介から参加青年たちの個性を生かした着物、箏、習字、剣道等の伝統的なものまで最新の映像技術を駆使した素晴らしいものであった。

11月7日、台風ナクリの進行速度が遅くなり、今後、にっぽん丸は台風ナクリのから300マイル以上の離隔距離を保って、航行できるよう本船速力を上げて航行することとした。引き続き、波を船尾から受け、さらに船体動揺を小さくすることができた。

11月7～9日のNPは、ブルネイ、カンボジア、ベトナムであった。それぞれの国の煌びやかな衣装、統率のとれた唄にダンスでみんなを魅了していた。

11月9日は一日早くホーチミン沖に到着しドリフティングで時間調整をした。台風ナクリの影響を受けないよう前面突破するべく、速力を上げて航行したためである。その日は管理部から「大きな揺れを感じなかった、船酔いもなかった」との話を伺い、ホッと胸を撫で下ろした。なお、悩ましてくれた「ナクリ」はカンボジアが名づけ、夜香木、ナイトジャスミンとの事だそう。悩ましい香りなのであろう、鑑賞してみたい。

2. ホーチミン～シンガポール～ヤンゴン～ポートケラン

11月10日ホーチミン入港、到着歓迎式で各国のPYは司会者の紹介、アナウンスとともに、にっぽん丸のタラップ上に整列して並び、国旗等の旗を持って掛け声、歌を交えてパフォーマンスを繰り広げる。各国とともに流れるような動き、リズムカルな動き、まとまりも良く格好良かった。小職を含め出席者全員、大喝采であった。その後、PYたちはホームステイ先へと出かけていった。各港でもPYたちはホームステイへ出かけ、歓待を受けていたようである。

11月13日、PYたちはホームステイ先から帰船し、出港前のセレモニーがあった。セレモニーの最後は山本管理官のピアノ伴奏のもと、ホーチミンの歌手、そしてPYたちの皆で「Nippon Maru Song」を歌い、大いに盛り上がり出港した。

ホーチミン出港後、11月14～15日のNPは、インドネシア、シンガポールであった。インドネシアのパフォーマンスではその地理的な広さによる文化の深さ広さが知ることができた。文化の幅が広くもPY全員のまとまりが素晴らしかった。シンガポールのパフォーマンスは皆を楽しませる楽しいジョークもあり、エンタテインメントぶりに驚愕した。

11月16日シンガポール入港後、17～18日とパースのシフトがあり忙しく、太陽の日差しが暑かった。11月19日の出港式では暑すぎて気分が悪くなるPYもいたようだ。

シンガポール出港後、11月20～21日のNPは、ラオス、ミャンマーであった。ラオスの国の花がブルメリアと知る。ブルメリアは小職の家の庭で咲いている可愛い花なので親近感を覚えた。

11月22日ヤンゴン入港、パイロット乗船の6時間以上前から漁船の隊列を避航するべくスラローム操船を強いられた。そして、パイロット乗船して川上り、水深が大きく変わっており航行できない箇所があったり、岸壁前面の灯浮標や構造物が無かったり、ヤンゴンはパイ

ロット無しでは入港できない港である事を痛感した。

ヤンゴン出港後、11月26～28日のNPは、フィリピン、タイ、マレーシアであった。フィリピンのパフォーマンスは幕開けからのアカペラの唄で皆が感動していた。個人的にこのアカペラ唄の上手さ、演出は今回のNPで一番良かった。タイのパフォーマンスはPYたちの全員の個性が豊かで楽しいショー、そしてマレーシアのパフォーマンスは美しい衣装、切れ味のあるダンス、唄でみんなを魅了していた。

11月29日ポートケラン入港、各港でも実施されていたのだが東南アジア青年の船の同窓会、Reunion Onboardがポートケランでも12月1日に開催された。衣装のテーマを“サッカー”として、老若男女の元PYたちみんながテーマ衣装を称賛しあったり、笑いあったり、昔話にも花が咲き、大きく盛り上がった。Reunion Onboardといえば、ヤンゴンでのReunion Onboardの元PYのスピーチで、「東南アジア青年の船」事業には3つのSickがあるとの話が印象的であった。3つのSickとは次のとおりである。「Sea Sick（船酔い）、Ship Sick（船を離れる寂しい思い）、Love Sick（愛するPYと離れる寂しい思い）」。この話は後日、実感することとなった。

3. 台風カンムリ避航～SULU SEA航行～太平洋

ポートケラン入港前より台風カンムリが発生し、この台風が太平洋からフィリピン・ルソン島を横切って、またもやバシー海峡へ向かっているとの情報が入ってきていた。にっぽん丸が航行を予定していた南シナ海の計画針路の全海域は波高が3～6 m、風速も20m/s以上となり、南シナ海は危険水域である。そこで、あらゆる気象情報を基にしてフィリピン・パラワン島の東側水域SULU SEAを航行して太平洋側へ抜けることとした。当該水域は、サンゴ礁が多く点在し、島々の狭い水域を縫うように航行する必要がある、小職自身も航行したことが無い事もあり不安があった。

12月2日ポートケラン出港、12月3日シンガポール、そしてEastern Bankを通過し、フィリピン・パラワン島の南へ向首すると、船首左舷側から約2 mの波、風速15m/sの風を受けて、船首の縦揺れPitching、船首と波が激しくぶつかり合うPunchingが始まった。12月4日、パラワン島へ近づくと連れて、Pitching、Punchingは小さくなっていった。

そして、12月5日SULU SEA入域、晴天で太陽が輝き、一気に波、風も穏やかになり、鏡のような水面、海面は青、緑、黄色といろんな色、表情を見せる。誰もがこの海を綺麗と感じたであろう。DECK上から大きな歓声が上がっていた。

次の日12月6日もSULU SEA航行、島々を縫うように航行する狭い水域を明るい時間帯に調整し、また、引き続き波、風が穏やか、晴天であったため、比較的余裕

のある操船が可能であった。PYたちにとっては綺麗な海、空に加えて緑豊かな島々を眺めることができ良かったのではないだろうか。DECK上からの歓声はさらに上がっていた。

結果として、台風カンムリが良い航路へ導いてくれた。「カンムリ」は日本が名づけたそう。星座の「かんむり座」、「冠」からとったそうである。「新たに沐する者は必ず冠を弾く」といったところだろう。

そして、12月6日16時過ぎ、SULU SEAを抜けて太平洋に入る。すぐに、船首の縦揺れPitching、船首と波が激しくぶつかり合うPunchingが始まった。

4. 太平洋～東京へ向けて

12月7日、波高約2 m以上、PitchingとPunchingはおさまらない。PYたちが船上での最後の休みとのことなので、動揺を抑えるべく船速を落として航行した。天気予報ではこれから前線を伴う低気圧がにっぽん丸と一緒に東へ進む、波高は3 m以上と、さらに厳しい気象、海象となる予報であった。

12月8日波高3 m以上、風はまだ弱く、Pitching、Punchingは耐えうる程度であったが12月9日の朝にかけて、波高3 m以上、風強く30m/s以上となった。PitchingとPunchingが激しく、船橋にも飛沫が上がってくる。「ドーン、ドーン」と波と船首がぶつかる音が鳴り響く、この12月8～9日が今航海の最大の荒天、揺れであったであろう、本船の乗組員の多くが眠れなかった。PYたちも苦しかったのではないだろうか。

12月10日、PitchingとPunchingは小さくなってきた。また、12月12日の東京入港の時間に余裕が出てきた。そして、12月11日は晴天の予報が入ってきた。前日までの荒天で皆がぐったり疲れ果てていたので、田子の浦沖「富士山」へ進路を向けて、皆の疲れを吹き飛ばす計画を立てた。

12月11日6時頃、いろんなところから歓声があがる。朝日とともに、晴天の青空をバックに白い帽子を被った大きな富士山が目の前に立っている。まるで、「おかえりなさい」と言わんばかりだ。この日は夕方の航行再開まで管理部、PYたち全員がDECKで写真撮影を大いに楽しんでいた。PYの誰かが、富士山に向かって澄んだ大きな声で「Nippon Maru, Sailing the Blue Blue Ocean～」とNippon Maru Songを唄っていた映像が美しく、目に焼き付いた。富士山に感謝であった。

12月12日5時頃より見慣れた東京湾の浦賀水道、中ノ瀬航路、東京西航路を航行し、8時には晴海に着岸した。

この日の夜は解散交歓会、管理部、PYたちとの最後の交歓会であった。みんなが「大きな揺れもなく、安全航海をありがとう。また、富士山には感動した。」と言ってくれた。大きく揺れて大変な日もあったのだが、富士山の効果があったのであろう。改めて富士山に感謝

である。

12月13日全員下船。インフルエンザに罹った方もいたが、大事には至らず全員下船となった。そして、PY、管理部、みんな、各国入り乱れて抱き合い、大泣きであった。いろんな思い出がフラッシュバックしたのであろう。にっぽん丸の乗船期間の42日間は充実した日々だったのであろう。みんなが兄弟、家族となったのであろう。小職もいろいろな事を思い出して涙をこらえて笑顔を作った。また、元PYの3つのSickの話を思い出し、このSickを乗り越えて成長するのだなと実感した。

全員が無事に下船したことで第46回「東南アジア青年の船」事業での本船の業務は終了。一方、PYたちの絆は繋がっており、この絆は東南アジアだけでなく、世界中へ広く深くつながっていくことでしょう。そしてこの絆が平和な社会が形成していくことよう、当該事業が継続していくことを望みます。そこで、にっぽん丸がお役に立つことができれば本望です。

最後に、無事に業務を終えたことにつきまして、山本管理官をはじめ管理部スタッフ、陸上でご支援を頂いた方々も含めた本事業の関係者皆様に御礼を申し上げます。ありがとうございました。

内閣府青年国際交流事業報告書2019

令和元年度 第46回「東南アジア青年の船」事業